もう一度会えたなら

もう一度会えたならーside Avan

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=17444640

ダイの大冒険, アバン, ヒュンケル, マトリフ, ダイ, 師弟邂逅祭, 誇りの一番弟子

師弟オンリーイベント「誇りの一番弟子」お題企画「師弟邂逅祭」に合わせて出させていただきました。
こちらはアバンside。
テーマは「涙」

「あるべき未来に進むために」8 novel/15621709のシーンを引用していますが、未読でも問題ありません。

もう一度会えたなら－side Avan

　アバンは、自分にすがって泣く弟子たちを、ただ黙って抱き留めていた。
　ダイ。
　ポップ。
　マァム。
　自らが慈しみ育てた弟子たちを抱きしめ、アバンは穏やかに彼らを見つめた。
—大きくなったものだ・・・。
　アバンは嘆息した。
　ダイとポップとは、離れていたのはわずかに数か月にすぎない。
　それでも、自分がいなかった期間に、見違えるほど、彼らは強く、たくましくなっていた。
　それは、ほんの少し、彼らの戦いを見ただけですぐに分かった。
　その弟子たちの成長が、アバンにはたまらなく嬉しかった。
　アバンは、ポップを抱きしめ、ダイの頭を撫で、マァムに微笑んだ。
　そして、アバンは、ゆっくりと視線を上げ、3人の向こうの空へとその眼差しを向けた。

　絵具を溶かしたような澄んだ青空を背景に、銀の髪が陽光に映え、輝いていた。
　広い肩幅に大きな背中。
　長身に、髪と同じ銀の鎧をまとった後姿が目に映る。
　もう少年ではなかった。
　だが、後ろ姿であっても、そこに立つ男が何者なのか、アバンにわからないはずがなかった。
—・・・大きく、なりましたね。
　アバンは、もう一度同じ言葉を胸の中でつぶやいた。
　アバンに背を向けたまま、彼は振り返らなかった。
　だが、その肩が小さく震えていることが、彼がわずかにうつむい

ていることが、背後からでも見て取れた。
　顔は見えなくても、その表情は、容易に窺い知れた。
―・・・泣いてくれるのですね、あなたは・・・。
　アバンは、自身も涙の滲みそうな笑顔を浮かべた。
　先ほどちらりと見えた、一番弟子の面を脳裏に蘇らせた。
　アバンが近づいてくるのを目の当たりにしたヒュンケルは、ひどく驚いた顔で、呆然としたまま、アバンを見つめていた。
　そして、しばしの後、目の前にいる男が何者であるのか気付くと、ヒュンケルは、何かをこらえるように、ぐっと唇をかみしめて目を閉じ、そして、すぐに背を向けたのだ。
　その一瞬見せた表情は、ひどく幼く、アバンとまだ旅をしていたころの少年だったヒュンケルを思い起こさせるものだった。
　ヒュンケルがまだアバンと旅をしていたころ、幼かったヒュンケルは、アバンに対しては険しい目を向けることが多かった。だが、まだ子どものこと、ずっと気を張っていることもできず、ふとした合間に、子どもらしい表情を見せることが度々あった。
　それは、初めて海を見たとき。
　野に咲く花を見つけたとき。
　美味しいものを食べたとき。
　教わった技がうまくできたとき。
　そんな折々に見せた、幼い日の穏やかな表情を彷彿とさせる、その面影が、いまのヒュンケルから見て取れた。
　憎しみを張り詰めさせていても、幼かった彼は、その糸をずっと保っていられなかったのだろう。
　アバンに対して見せる表情も、行きつ戻りつ、彼は、旅の中で、地上に生きる人々の暮らしぶりを受け入れようとしていたときもあった。
　いつか、旅の途中で見た、黄金の小麦畑に沈む夕日。沈む陽の光に照らされて輝く、人々の生きる大地を前に、少年だったヒュンケルが、アバンに問いかけた言葉が、アバンの中に蘇った。
―これが、先生が守った世界だったんですね・・・。
　この風景の中に、俺もいて、いいんですか？
　そのときに、少年の見せた戸惑いながらも、幼く、そして素直な

表情が、いま目の前で、ヒュンケルがアバンに垣間見せた面と重なった。
　それだけで、アバンは、彼が自分との間のわだかまりを昇華させ、そしておそらくは、亡き父の遺言に自力でたどり着いたのだろうと推測した。
　人間らしく生きてほしい、との父の言葉へと。

　アバンは、その震える肩を、わずかに丸めた背中を、その目に映し、聞こえない声で、失ったはずの一番弟子に語り掛けた。
―・・・あなたが生きていてくれてよかった・・・。
　それだけで十分なのに・・・あなたはこうして、皆と一緒に戦ってくれている。
　そして、私のために・・・泣いてくれるのですね。
　アバンは、思った。
　今日が、晴れた日でよかった、と。
　澄み渡る空にヒュンケルの後姿が、浮き上がる。
　その明るい空の色が、そのまま、彼ら師弟の長いこと解消できなかった澱を溶かしていくようであった。
　アバンは、心の中でつぶやいた。
―あなたにもう一度会えた。
　それだけで、私は救われたように思います。
　ありがとう、ヒュンケル。

　１０年以上もの間、アバンが探し続けた後ろ姿が、そこにあった。

　ルーラの着地音が響いた。
　その音を耳にすると、高齢の大魔導士はやれやれとため息をついた。
　バルジの大渦を目の前に見るこの洞窟を訪れる者など、数えるほどしかいないのだ。ましてや、ルーラの使い手は、もともとさほど多くはない。
　マトリフは、その着地音の主にすぐに思い当たった。

「こんにちはー！」
　思ったとおりの明るい声が響いた。
　マトリフが振り返ると、明るい髪の若い男が、洞窟の入り口近くに立っていた。
「お久しぶりですね。
ちょうど近くまで来たんで、寄ってみたんですよ。」
「アバン。」
　かつてマトリフがともに戦った元勇者は、以前と変わらない笑顔をマトリフに向け、その場にたたずんでいた。
　成人扱いになってまだ数年しかたっていない彼は、この頃はまだ、少年と言ってもいいくらいの容貌をしていた。実年齢よりもいくぶん幼く見えるこの男は、以前と同じように、人懐っこい笑顔を浮かべていた。
「ついでに、ちょっと読んでもらいたいな、と思いまして。
魔法のところをですね。
　魔法の章は書き終わりましたけど、やはりマトリフに読んでもらって、直すところは直そうと思いまして。」
「ま、俺も暇だから構わねえがな・・・。」
　そう言えば、アバンは、この前ここに来た時には、自分の経験を本にまとめていると言っていた。その本がある程度形になってきたのだろう。
「お願いします。
　あ、お菓子持ってきましたんで、お茶も入れますね。一緒に食べませんか？」
「ああ・・・。」
「じゃあ、マトリフに読んでもらっている間に、お茶の用意をしますね。」
　そうして、アバンは、マトリフの洞窟の壁際に、肩にかけてきたナップザックを下ろし、その中から取り出した書物をマトリフに差し出した。アバンが執筆途中の、彼の覚書だ。
　マトリフがそのページをめくりながら文章を追いかけていると、アバンが声をかけてきた。
「お台所、借りますね。」

「ああ。」
　マトリフが顔もあげずに返事をすると、アバンは、勝手知ったる他人の家、とばかりに、炊事場に行き、火を起こし始めた。湯を沸かそうというのだろう。
　アバンは、作業をしながら話をつづけた。
「カールでは、午後にお茶の時間があるのですが、お茶のお供にするお菓子が結構重たいんですよね。もう食事並みと言いますか。」
「知ってるよ。俺も多少、カールにいたからな。」
「そうでしたね。
　でもおかげで、カールではお菓子の文化が発展しましてね。都には、職人も大勢いますよ。最近のはやりは、ベリータルトでしょうか。」
　マトリフが返事をしないでいると、アバンはそのまま話し続けた。
「今日はそのタルトを持ってきたんです。あんまり甘くないようにしたので、マトリフでも大丈夫だと思いますよ。以前、職人の方に作り方を教わったんです。」
　マトリフは、アバンの言葉を聞き流しながら、彼から受け取った書物の文章の校正をつづけた。
「あとですね、最近カールやベンガーナで人気の、いい香りのする紅茶も持ってきました。最近は紅茶に香り付けするのが流行っているみたいですね。」
　あまり内容がない話を続けるアバンの言葉を、マトリフが制した。
「・・・アバン。」
　だが、聞こえているのかいないのか、アバンは構わず雑談を続けた。
「紅茶って、意外に、淹れるのに気を遣いますよね。分量とかお湯の温度とか、むらし時間とか・・・。」
「アバン。」
「あ、もうちょっと待っててください、マトリフ。まだ時間が・・・。」
「自分の気持ちをはっきり言わないのは、お前の悪い癖だ。」

マトリフがぴしゃりと釘を刺した。
　マトリフには、アバンが核心を避けて無駄な会話をしているようにしか思えなかった。
何を避けているのかは、マトリフにも察しはついていた。
　アバンが語らないこと、語ろうとしないことは、却って彼の言いたいことを雄弁に浮きあがらせていた。
　マトリフの言葉に、アバンは、一瞬驚いた顔をした。だが、すぐに表情を崩し、切なげな笑顔をその面に浮かべた。
「・・・やっぱり、そう思います？」
　マトリフは、椅子に座ったままアバンを見上げた。だが、座っているはずのマトリフの方が、何故か大きく見えた。
　マトリフは、言葉を投げかけた。
「アバン。思うところは吐き出してけ。
　そのために来たんだろうが。」
　すると、アバンは、困ったような笑顔を作った。
「敵いませんね、マトリフには。」
　しかし、それも一瞬のこと、アバンはすぐにいつもの柔和な笑みに戻ると、マトリフに承諾を求めた。
「でも、とりあえず、お茶は淹れますね。
　・・・私も気持ちを落ち着かせたくて。」
「好きにしろ。」
　アバンはマトリフに背を向け、再び炊事場で竈の火を見ていた。
　マトリフは、そのアバンの背中をちらりとみやり、そしてまたすぐに、アバンから渡された書物に視線を落とした。
　湯を沸かし、紅茶を淹れる支度をしながら、ぽつり、ぽつりとアバンは言葉を紡いだ。
「・・・最近は、カールとベンガーナの国境辺りを探していたんです。ちょっと足を延ばしてアルキード方面にも行ってみたり・・・。
　中でもベンガーナは、人口が多いから、期待してたんですけどね。」
　そしていったん言葉を区切ると、マトリフからは見えないその瞳に切なげな色を浮かべた。

「すごく、よく似た子を見つけたんです。背格好も年齢も同じくらいで、銀の髪で。遠目に見たときには、本人かと思いました。
　・・・でも、違った。
　最近は、こんなことばっかりなんです。
　本当に全く手がかりがなくて。
　忽然と、姿を消してしまって・・・。」
　そして、アバンは、珍しく弱音を口にした。
「こんなことばかり続くと、不安になります。」
　アバンは、はっきりとした名をあげなかったが、誰のことを語っているのか、マトリフにはすぐに分かった。
　だが、マトリフは、言葉の刃で、アバンの想いを一刀の下、切り捨てた。
「やめちまえよ。」
「マトリフ？」
「やめちまえばいいんだよ。もともとお前が背負い込むような話じゃなかったんだ。」
「どうしたんです、急に。」
「アバン、お前があの坊主の将来に責任を負う立場になんかねえってことだ。
　お前はこの世界のために魔王と戦った。
　そして、俺たちの世界には平和が戻った。
　たまたま、あの坊主の親父が、魔王の配下だった。
　それだけだ。
　お前があの坊主を引き取る義理なんかねえんだよ。」
　畳みかけるように、マトリフは否定の言葉を口にした。その冷たい意味に、アバンは戸惑い、言葉が返せなくなっていた。
「第一、お前があの坊主とはぐれてどのくらい経ってんだよ。もう１年以上だろ？
　いま生きてるのか、死んでるのかだって、定かじゃねえ。
　いや、むしろ死んでる可能性の方が高いだろう。
　１０歳にもならねえ坊主が、お前とはぐれて一人で生きていけるわけがねえ。」
「いいえ！生きています！」

アバンは叫んだ。振り返ってマトリフに向き直り、まっすぐに彼を見据えていた。
「ヒュンケルは生きています！！」
「・・・なんで言い切れる。」
「だって、あの子に渡した輝聖石はまだ輝いています。それはわかります。
　あの輝聖石と対になる残りの輝聖石が、私の手元には残っています。だから、あの子に渡した輝聖石が輝きを失ったらすぐに分かります。」
　そして、きっぱりとアバンは断言した。彼らしい、明確な言葉だった。
「ヒュンケルに渡したあの子の輝聖石は、輝きを失っていません。だから、ヒュンケルは生きています！」
「絶対に、か？」
「ええ、絶対です！」
　挑むようなまなざしを受け、マトリフはアバンに尋ね返した。
「で、どうする？」
「探します！探して、見つけます！！」
「なんでそこまでする？」
「だって、あの子は、私の弟子ですから。
　あの子にまだ教えていないことは、たくさんあります。
　もっともっと、教えたいことがあったんです。
　私があの子を育てていきたいんです。」
　アバンは、ヒュンケルの父を自分が殺したからだ、とは言わなかった。
　ヒュンケルを育てる義務がある、とも言わなかった。
　ただ、アバン自身がヒュンケルに教えたいことがある、育てていきたいのだと答えていた。
　マトリフは、口の端をあげた。にやりと、笑みを浮かべた。
「なら、いいじゃねえか。」
「マトリフ。」
「探すんだろう？
　だったら、そうすりゃいいんだよ。」

アバンは気付いた。
　マトリフは、アバンに言わせたかったのだ。
　ヒュンケルは生きている。
　必ず探すのだ、と。
　自信を失いかけていたアバンに、改めて、自分の言葉で決意をさせたかったのだ。
「・・・ありがとうございます。」
　マトリフの意図に気付き、アバンはマトリフに礼を言って頭を下げた。
　マトリフは、にやりとした不敵な笑みを浮かべたまま、アバンに言葉を返した。
「お前らしくねえぜ、アバン。
　ま、でも、不安になったら何時でも来いよ。
　話くれえは聞いてやるぜ。
　大魔導士の人生相談なんて、貴重じゃねえか。」
　そう言って含みのある笑みを浮かべるマトリフを前に、アバンは、この人にはかなわないな、と思った。

　木刀の打ち合う音が響いた。乾いた音が小気味よい。
　一合、二合、打ち合う。
　間合いを取ったのだろうか、少しの間を置き、そしてまた、木刀が打ち合わされる音が響いた。
　ダイの繰り出す木刀の攻撃を受けながら、アバンは笑みを浮かべた。
　幼いながらもダイの一撃は、気力も籠っており、素早く力強い。アバンも集中をして、ダイの攻撃をいなし続けた。
「でやあぁっ！！」
　ひときわ大きく振りかぶり、ダイはアバンの頭の上から一撃を打ち下ろした。
　だが、アバンは予想していたその攻撃を受け止めると、彼もまた、これまでよりも強く薙ぎ払った。
「うわっ！」
　予想以上に強い切り返しを受け、ダイはバランスを崩した。

そのダイの背中を、アバンの木刀が軽く突いた。
「わわっ！！」
　そのままダイはつんのめって、顔面から倒れた。
「はい、チェックメイト。」
　頭上から、アバンの明るい声が降ってきた。
　ダイは、手をついて起き上がると、地面の上に座り込んだ。
「あーあ。今回は1本とれると思ったのになあ。」
　そう言ってダイは、悔しそうに唇を尖らせた。
　だが少年は、すぐに、きらきらとした笑みを浮かべた。
「でも、やっぱり先生ってすごいですね！おれも先生と特訓するようになって、強くなってきたなって思ったのに、全然かなわないんですから。」
　そう言って、ダイはいっそう目を輝かせてアバンに語り掛けた。
「このまま特訓を１週間続けたら、おれ、本当に勇者になれますか！？」
　アバンは、このダイの素直さをことのほか、気に入っていた。ダイの少年らしい希望にあふれた言葉は、アバンの胸の内をくすぐった。
　アバンは、穏やかに微笑むと、大きくうなずいた。
「ダイくんなら、大丈夫ですよ。」
　アバンの言葉に、ダイは照れたようにはにかんだ。
　すると、今度は、アバンは、眼鏡の奥の瞳を意地悪く輝かせながら、ダイに釘を刺した。
「でも、特訓はどんどん厳しくなりますよ？むちゃくちゃハードですが、大丈夫ですか？」
　その言葉に、ダイは一瞬ひるんだが、すぐにアバンに反論した。
「大丈夫です！おれ、勇者になりたいんです！」
　アバンは、にこにことほほ笑みながら、ダイの言葉に頷いた。
「ダイくんは、剣の筋がいいですね。このまま伸ばしていきましょう。」
「本当ですか！？やったあ！」
　アバンの賛辞に、ダイは少年らしく素直な喜びを見せた。
　アバンは大きくうなずいた。

「ダイくんの剣には、気迫があります。力も強い。ただ、もう少し緩急をつけた使い方を覚えた方がいいですね。それは私が教えます。」
「はいっ！」
　ダイと言葉を交わしながら、アバンは不意に感慨に襲われた。
　剣を教えるのは久しぶりだった。
　ダイの剣は、筋がよく、また、ダイも剣を教わっているときは実に楽しそうだった。ダイは魔法の素質もあったが、剣を伸ばしていくのがいいだろうとアバンは考えていた。
　随分前にも、こうして剣を教えたな。もっとも、あの子はこんなに素直じゃなかったが。
　アバンの脳裏に懐かしい思い出が蘇り、ふとそんなことを思った。
「さ、ダイくん、もう1回やりましょうか。」
「はいっ！」
　そうしてまたアバンが構える木刀に向かって、ダイが打ち込みを始めた。
　そのダイに、森の光が差し込みその姿を鮮やかに浮き上がらせた。
「だあぁっ！」
　自分に向かって木刀を振りかぶるダイの背中を、陽光が照らす。
　逆光になった少年の影は、その色を失った。
　少年の背後に上る太陽の光が、少年の髪を照らし、その日の輝きが、アバンの目に錯覚を起こさせた。
　黒髪であるはずの少年の髪が、その縁が、陽の光を受け、一瞬、銀に輝いたように思えた。
　アバンは目を見張った。
　瞬く間に過去に引き戻される。
　かつて、同じ光景があったような気がした。
　記憶が明確によみがえる。
　いまと同じように、アバンに打ち込みをした少年があった。
　その姿が、まざまざとアバンの目の前に蘇り、ダイの姿に重なった。

—・・・ヒュンケル！？
「もらった！！」
　その声は、ダイの声だったのか、それとも、かつての少年のものだったのか。
　はっと意識を引き戻し、気を取り直したアバンは、目の前に迫りくる木刀を見た。とっさに、何も手にしていない左手でその一撃を受け止めた。
　アバンのすぐ目の前に、木刀を振り下ろしたダイの姿があった。
　渾身の一撃だった。
　アバンは痛みをこらえて、笑顔を作った。
「・・・グッドです。いい一撃ですね、ダイくん。」
　その言葉に、ダイはたちまち笑顔になった。
　アバンは、左手の痛みに涙目になりながら、ダイに向かって片目をつぶった。
「こんなに早く私に両手を使わせたのは、あなたが初めてですよ。」
「本当ですか！？やったーっ！！」
　ダイは小躍りして喜んだ。
　ふと、ダイはアバンの言葉の裏に感じ取ったことを、疑問として投げかけた。
「先生、先生はおれのほかにも剣を教えた生徒っていたんですか？」
「・・・ええ、いましたよ。」
　アバンは言葉を続けた。
「私が立ち寄ったあちこちの村や町で、身を護るための初歩的な魔法や剣術は教えましたが・・・本格的な剣術を教えた相手は・・・ひとりだけでした。」
「へえ～。どんな人なんですか？」
「・・・なんと言っていいのか・・・。」
　ダイの質問に、アバンは言葉を濁した。
「でも、もしかしたら、どこかでダイくんと出会うかもしれませんね。」
　そう言ってアバンは、いつものように穏やかに微笑んだ。

世界を旅しながら、アバンはいつも思っていた。
　もう一度、ヒュンケルに会いたい。
　あの子に会えたのなら、話したいことが、かけたい言葉がたくさんある。
　ずっと、アバンはそう思っていた。
　だが、こうして、かつての一番弟子の後ろ姿を目の当たりにしたいま。
　何も、言葉は出なかった。